

随想

一 病 息 災 の ス ス メ

医療法人岡崎内科 岡 崎 望

人は誰しも無病息災を念じてやまない。息災とは、無事のことを意味し、元気で病気知らずであることに越したことはない。

しかし、永遠の命は有り得なく、いつか必ず生命体としての終焉を迎えねばならない。

ここで、一病息災とは、一つの病気があるために、無理を避け大事に生活することで、かえって息災な生活をおくれることを意味している。

医療に従事する我々は、毎日の臨床の場面で何らかの疾患に罹患した“患者”と対面し、ついついその症状、所見にのみとらわれ、その背景にある疾患に気付かないことが少なくない。一方、患者サイドに立ってみれば、通院している限りいかなる病気も早期発見、早期診断してくれるだろうとの信頼・安心感をもちえる“お医者さん”を選択して通っているのも事実であろう。

プライマリー・ケアを担当する診療所の医師の我々が、対象とする疾患の多くは、風邪などの急性疾患や高血圧、糖尿病、胃炎、高脂血症といった慢性疾患、そして、心身症、鬱病のごとき心の病である。これらの疾患を診断、治療している際に、何らかのきっかけで他の疾患を発見することも少なくない。

この数年の間に、父親と叔父を相次いで肺癌で失った。（この場をお借りして、お世話になった名寄市立総合病院の医療スタッフに感謝いたします。）

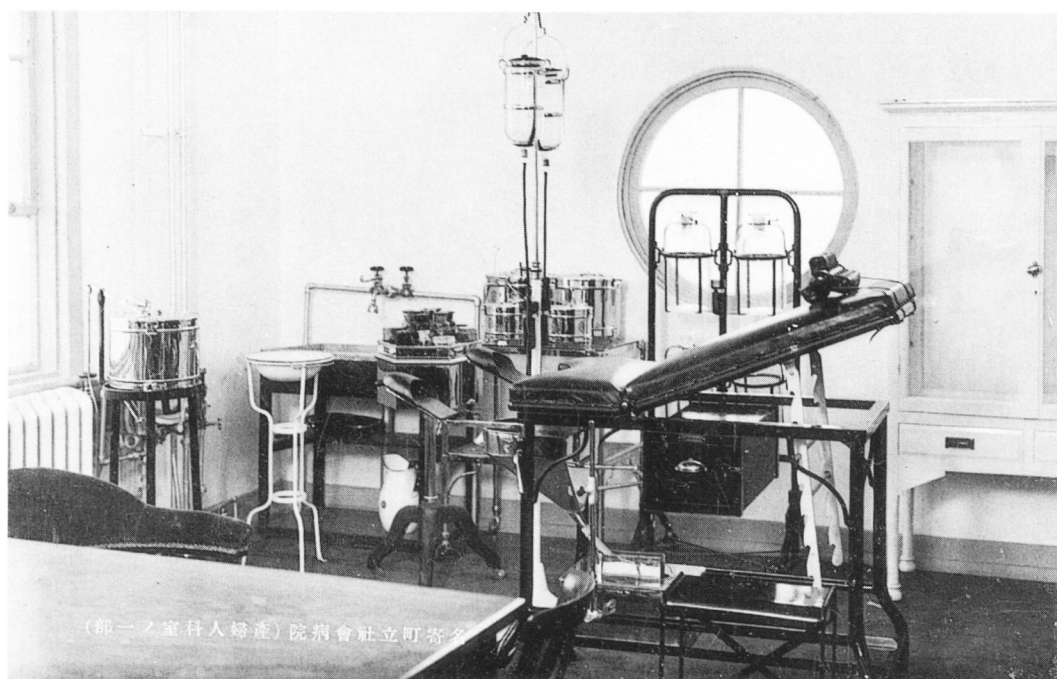
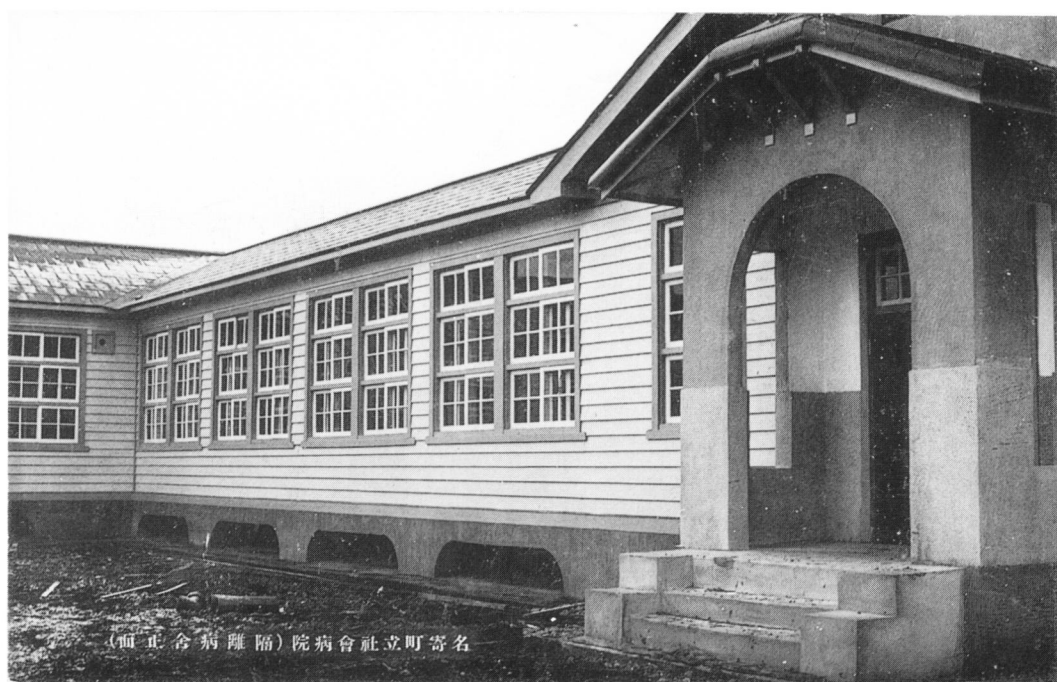
父親の場合、以前から患っていた肝硬変の療養中、血痰を自覚し自ら胸部レ線で発見。比較的早期発見であったものの肝機能がすでに手術適応を失なわせるほど悪化していたため、悪性新生物との共存を余儀無くされてしまった。一方、叔父の場合、健康そのもので多忙な仕事に追われていた

ため、遷延化した咳嗽をかなり放置し、呼吸困難を自覚しやっと小生のもとを訪れた。既に、進行し手遅れであった。

健康を過信し自らの身体を気づかわないことより、何か一つの疾患を持っているほうが、ずっと自らの生命に謙虚になれるのかもしれない。その病いを人生の道づれとして、身体をいたわり、悲観することなく、精一杯、限られた時間のなかで“生きる”こと、その姿勢こそ個人の一生の“価値”を決めるもののように思う。

二人のかけがえのない生命から、“一病息災”の意味を教えられたように思う。





名寄町立社会病院

(写真提供 中山正泰 氏)